

おろりよく 応緑 (姫路市) ゲート製造、リフォーム

〈データ〉1972年、「応緑商会」として創業。73年に株式会社化した。2022年4月期の売上高は約4億円。従業員36人。資本金5千万円。社名は目が安らぐ緑と、その安らぎの求めに応えたいとの意味を込めた。



防衛施設の展示会で披露されたテロ対策用ゲートの模型

こともでき、自衛隊、米軍の基地のほか、データセンターや発電所などでニーズが高まっているという。創業は1972年。証券会社の営業マンだった河越祥郎社長(76)が起業した。ガレージドアの販売から始めて、玄関ドア、富裕層の邸宅向けゲートと、事業を拡大させ、技術を磨いていった。

大型案件を手がけるきっかけは98年。二輪車などをつくる川崎重工業。明石工場で、約20分の間口の幅を電動ゲートで目ごとに変える難題をクリア。人力でも軽く動かせることに元請けのゼネコンも驚いた。

2009年には、航空関連のヒラタ学園が神戸空港内に構える拠点。さらに12年には岩国錦帯橋空港(山口県)で全長110m、17年には三沢空港(青森県)で同110mと、日本最大級の大型ゲートを敷設した。両空港は、停電しても手動で対応できることが条件だった。

滑らかな動きを支えるのは、レーザの施工精度。レーザ照射で細かく測定し、上下左右の誤差を0.5mmまでに仕上げる。戸車は抵抗の少ないものを使用。さびを防ぐためゲート本体を400度で溶かした亜鉛に浸す際には、作業に伴って本体に一時的なひずみが生じるが、それも

誤差1mm以内に補正する。工業高校出身の河越社長にとって「製品を開発するものが生きがい」だ。宇治茶販売の祇園汗利(京都市)本社のゲートは、勾配のある坂でも手動で開閉できる。「他では実現できない」という相談に応えてきた。門扉は電車の車窓の感覚でつくる。ルールも新幹線並みの精度だ。

門扉の開発 精度、耐衝撃 要望応え進化。

今月7日、東京・市谷で開かれた防衛施設に関する新技術の展示会。防衛省庁舎の写真をバックに置いたテロ対策用ゲートの模型が、同省関係者の注目を集めていた。重量や深さが通常の約5倍に上る基礎の設置などで、トラックが突っ込んでも阻止できるほどの耐衝撃性を持たせている。手で軽々と動かす

頑丈で、しかも手で軽く動かせるゲートに手をかける河越祥郎社長(いずれも姫路市京町1) (撮影・吉田敦史)



次の一手

「激動の中で 兵庫の企業」